

| | |
|-------------|---|
| Title | 第7回岐阜外科集談会 |
| Author(s) | |
| Citation | 日本外科宝函 (1960), 29(3): 887-888 |
| Issue Date | 1960-05-01 |
| URL | http://hdl.handle.net/2433/207097 |
| Right | |
| Type | Others |
| Textversion | publisher |

第7回岐阜外科集談会

昭和35年2月20日 於岐阜医大

(1) 腎皮下損傷の2例

県立岐阜病院 石山 勝蔵

第1例、42才男子、工員、作業中足を滑らせて自動車の車体で左側腹部前面を打撲。

以後該部の疼痛と血尿が続いた。保存的に加療していたが一進一退を繰返し自然治癒の見込みがなくなったので受傷後53日目に手術を行った。腎は完全に3コに断裂していた。

第2例、42才男子、病院看護人、太い松の木が倒れて左側腹部を打撲、以後該部の疼痛と血尿が有り、受傷後3時間で来院、直ちに手術を行った。腎は前後面に夫々腎盂に達する深在性破裂を認めた。2例共腎摘出術を行い全治した。文献的考察を加え更に診断及び治療特に手術の適応について考察を加えた。

(2) Linitis plastica の1例

岐阜医大第1外科 田原 浩明

37才の女子、胃癌の臨床診断の下に胃切除術を施行。剔出標本を検するに、肉眼的には粘膜下組織の著明な肥厚を認め、組織学的には結合組織の増生著明にして癌性細胞を認めなかつた。所属リンパ腺にも細胞浸潤を認めるが癌細胞を認めなかつた。即ち単純炎症性の Linitis plastica である。併せて若干の考察を加へた。

(3) 多量の胃出血を以つて始つた Werlhof 氏紫斑病の1例

岐阜医大第2外科 国枝 篤郎

約5年前から胃潰瘍を思はせる病歴があり最近多量の胃出血を来し胃潰瘍として治療を受けたが、軽快せず貧血が強くなり更に意識障害が加わつて来た。検査の結果始めて出血時間の著明な延長、Rumpel-Leede 氏現象強陽性、血餅収縮時間の延長を認め、血小板数は $56,000/\text{mm}^3$ で著明な減少を示したが、凝血時間は大体正常で特にその原因を求め得ないので、Werlhof 氏紫斑病と診断し、更に腰椎穿刺の結果蜘蛛網膜下出血による意識障害であることを確認した症例を経験した。種々の治療を試みたが出血性傾向は強くなり昏睡状態のまゝ死亡した。本症例は病歴に胃潰瘍

を思はせるものがあるので胃潰瘍に紫斑病が合併して来たとも考えられるが Werlhof 氏紫斑病で蜘蛛網膜下出血を併発する症例は珍らしいので報告した。

(4) 胃ポリープを合併せる胃癌の1例

岐阜市民病院外科 米谷 淳

67才の女性、上腹部の鈍痛を主訴として来院。上腹部に鶏卵大以上の腫瘤を触れ、弾性硬、表面粗造、可動性は著明でなく呼吸時に固定し得る。レ線で胃小彎部に陰影欠損を認めた。胃癌の臨床診断の下に胃全剔出術を施行した。切除標本は胃小彎部に噴門部より幽門部近く迄達する腫瘍を認め、この腫瘍に近接し幽門側に示指頭大の有茎ポリープ ($1.5 \times 1.3 \times 3\text{cm}$) を認めた。組織学的に腫瘍は単純癌で癌細胞は粘膜下より漿膜に至る全層にわたり浸潤している。ポリープは定型的ポリープの像を示し、どの部分を検索しても腺上皮には悪性所見は認めなかつた。両者が偶然合併したもののか、又は密接な関係があるかについて若干の考察を試みた。

(5) 結核性直腸狭窄の1治療例

岐阜医大第2外科 斎藤 晃

31才女子、5年間に渉る排便困難に対して、肛門括約筋保存による貫通式直腸切断術を行つて治癒せしめた。直腸狭窄部は肛門より約5cm口側を下界とし、これより口側3cmの幅を有し内腔は略々鉛筆の太さ程度で浅い潰瘍を伴つていた。組織学的には典型的な結核結節が認められた。猶手術時に回腸末端に数カ所の結核性と考えられる輪状狭窄が認められている。術後の肛門機能恢復は、約6週間後に完成したがそれまで最も苦痛であつたものは失禁である。この恢復状況は必ずしも諸家の報告と一致するものではないが、本症例の経験から、本法は適応を選んで応用する価値あるものではないかと考える。

(6) 腹直筋内特発性血腫の1例

羽島病院外科

浅井紀雄・河村雄一・伴敏英

直接外力によらざる腹筋内出血は比較的稀であり、特に非観血的に診断が確定され治療せられた症例は、

その報告が極めて少い。我々はその原因が咳嗽と思はれる症例を経験したので報告し、併せて諸文献を参照して若干の考察を試みた。

症例。生来健康な60才の8回経産婦。数日来可成り強い咳嗽を有し、突然右腹直筋に一致して肋骨弓から臍高に到る比較的境界明瞭な小児頭大、弾力性硬の腫瘤を生じ来院。

最初腹直筋内膿瘍を疑ったが対症療法中腫瘤は漸次増大し、約2週間で右腹直筋全体に及び出血性素因を認めたので試験穿刺にて腫瘤は血腫なる事を確認した。鎮咳剤及び止血剤の投与により全く非観血的療法にて全治せしめ得た。

(7) 後頭部頭皮のデルモイド・チステの1例

岐阜医大第1外科 和田英一・太田博造

デルモイド・チステ中で後頭部頭皮に発生するものは稀である。

25才。男子。後頭部正中線のやゝ左側で頭皮下に発生した鶏卵大、非炎症性の真正デルモイド・チステの1例を報告した。この症例は胎生時後頭骨癒合線より発生したと考えられ若干の文献的考察を加えた。

(8) 外傷性感感染創部に発生した皮膚癌の1例

岐阜医大第2外科 佐藤 収

患者は58才の男子、職業は農業。

既往歴・家族歴に特記すべきものなし、幼児期。発生した皮フ疾患のため、右頭頂部に拇指頭大の癰痕性頭髪欠損部を認め、この辺縁に2～3個のVerruca様の結節を認めていた。昨年8月中旬同部を打ち挫創を認め治療を受けたが治癒せず、受傷約3ヵ月後に至り同部が無痛性に腫脹、悪臭を伴う分泌物、及び出血を認める様になった。本年1月入院時、右頭頂部に拇指頭大の潰瘍を伴う鶏卵大の腫瘤を認め、右側々頸部にリンパ腺転移を認めた。1月19日手術的に剔出し

以後抗癌物質の投与中である。剔出腫瘍は組織学的に有棘細胞癌であつた。皮フ癌発生につき文献的考察を加えたが、本症では、皮フ癌発生の母地が幼児期に出来た。皮フ疾患のためと思われる癰痕、癰痕の辺縁に認めた Verruca 様の結節等であつた点が興味深いと思う。

(9) 慢性骨髓炎瘻孔より発生せる皮膚癌の1例。

岐阜医大第1外科 神本 敏治

73才の男子。農夫。55年前から右下腿に難治性潰瘍あり、3回外科的手術を受けたが治癒せず、約2年前から潰瘍の拡大(5×5cm 長楕円形)、疼痛及び分泌物の増加、悪臭の発生とがあつた。潰瘍に一致し右脛骨に骨膜欠損部がありレ線像では巨大な骨透亮像を認めた。下肢切断術、組織学的には扁平上皮癌であつた。

難治性潰瘍に関係した癌の本邦報告36例中、本症例は最も長期に亘り潰瘍の存続したものである。

(10) 骨髓炎性脛骨仮関節の1治験例

岐阜医大整形外科 松永 隆信

症例 8才の女兒

2才の時左脛骨の化膿性骨髓炎にかゝり、その上部で病的骨折をおこし仮関節を形成、6才の時腸骨片の移植術をうけたが不成功、下腿の著明な内反兼前反、6cmの短縮を呈している。これに対して脛骨前面の皮膚癰痕部をさけて腓骨寄りに前外側切開を加え、Hahn氏法による腓骨の有柄移植術を行う。腓骨上部を横切して下骨片の上端を内方に移動させて脛骨上骨片の外側に一本の金属螺子で固定した。骨移植、仮関節部の骨新鮮化は行わず、手術創は一部化膿したが有窓ギブイ固定を6ヵ月行い骨癒合完成、下腿の変形も矯正され、その後金属螺子を摘出して創は閉鎖した。術後1年4ヵ月の現在脛骨腓骨間の骨癒合は強固で関節拘縮もないが、尚5cmの短縮あり。